

第26回 (R2. 2)

追憶の建国記念日

昨年しんねんの春、桜吹雪が舞う朝のことでした。川津在住の元高校教師が九十一年の生涯を閉じました。

今から半世紀程前、高校二年生の私は、この先生の日本史の授業を受けていました。ある冬の日のことです。先生は「今日は建国記念日について話します」と少し緊張した面持ちで話し始めました。先生は「国の誕生を記念する日を、神話かみわらに依拠よするのはいかがなものか」「歴史学者は皆反対し、皇族の三笠宮殿下みかさのみやすら、歴史学者の名誉にかけて反対されている」と熱弁を振るわれました。

今では国民の休日として定着している建国記念日も、始まった昭和四十二年当時は紀元節の復活だといった反対意見もあり、世論は二分していました。そして、先生は次の

言葉で授業を締めくくったのです。「国は強引に二月十一日を休日にした。私はこれに反対なので当日は出勤する。諸君の中で関心ある者は登校し、ともに歴史について学ぼう。」無垢で臆病な私は、こんなこと言って先生は大丈夫かな？などと心配をしつつも、当日は登校することもなく、ガールフレンドと新しい祝日を存分に楽しみました。しかし、先生の歴史学者としての矜持きんぢに触れ、その衝撃は忘れがたいものになったのです。その後、私は大学で日本史を専攻することになるのですが、毎年建国記念日が来るたびに、あの日の先生を想い出すのです。

我が師

野々村淳先生

安らかに。